毎月1回20日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月28日）　①

山と博物館

第3巻　第8号　　1958年8月20日

焼岳・乗鞍岳を望む

昭和電工大町工場　石原守明

8月なかばの晴れわたった或る日、独標へ向う道すがら、ふと振りかえると眼下には西穂の小屋、そして樹林の彼方に焼岳がくっきりと特異な肌をみせ、左手遥か乗鞍が大空をよぎっている。その稜線にきらめく流れは乗鞍行のバスであろうか、何台もが山頂に進んでゆくのがみえる。ファインダーをのぞいている私に、待ちあぐねた友が彼方からヤッホーと呼びかけてきたので急いでシャッターを切った。

大　町　山　岳　博　物　館

鹿島・白馬連峰の高山蝶

大町山岳博物館学芸員 福島 融

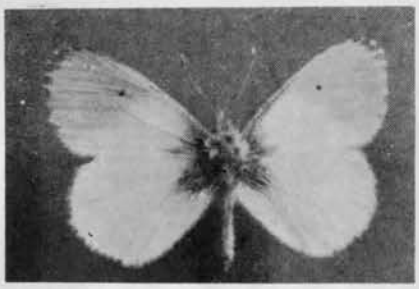
北アルプスの北の一角を占める鹿島（後立山）連峰は日本海に近いため驚くほどの豊雪に覆われて、恐らく北ア随一でもあろう。また霧深く特に白馬岳山塊ははなはだしい。このような特殊環境においての蝶類もまた変化に富んでいるが、上高地のそれのように豊富ではない。しかし分布状態などには一段と興味深いものがある。

本邦産高山蝶として数えられるものは大体6科12属16種（2亜種）で、本州産のものは5科、9属、11種、（1亜種）である。他は北海道大雪山塊に限られる。さて鹿島・白馬岳（白馬岳—蓮華岳2798.7m）周辺にはどの程度高山蝶を産しているだろうか？これはなかなか決定の難かしいことだが、現在までの調査データーにしたがえば5科、6属、7種である。

1 クモマツマキチョウ

Anthocaris Caraumines isshikii Matsumura

本種はシロチョウ科の美麗種でその美しさ可憐さにおいては王座をしめ、蝶類愛好家連に最も珍重されてきたが、近年その分布や生活史が調べられるにしたがって今まで考えられていたより、かなり低地域にも早春発見されるようになり、数も大分増加している。すなわち、むしろ1000m位の森林帯の渓沢に多い。この蝶は当地方に因念が深く、明治43年7月18日爺ケ岳西方の棒小屋乗越地籍より日本最初のオス1頭を記録したところでもある

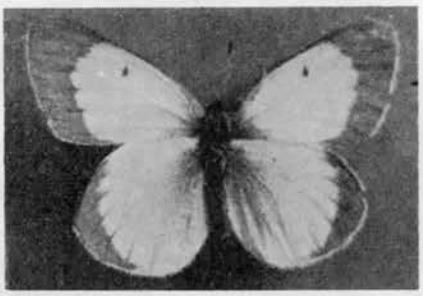


北小谷や北城など姫川流域（400mぐらい）では雪どけとともに4月下旬—5月上旬、籠川や高瀬川入（1000m）附近では5月中旬—6月一ぱい、ずっと上って海抜2000m以上になると7月一ぱいというように標高が増加するにしたがって出現期は遅れる。食草はアブラナ科のミヤマハタザオで母蝶は一卵宛つぼみの直下の茎へ産みつけ、幼虫は花弁や莢サクのみを食べて成長する。野外での蛹化場所はいまだ実見しないが飼育箱内では全ての個体が比較的食草の太い茎に懸蛹を営んだ。なお当地以外の本邦産地としては、次の諸地が上げられる。乗鞍、槍沢、島々谷、八ケ岳、戸隠などである。

2 アルプスモンキチョウ

Colias Palaeno Sugitanii Esaki

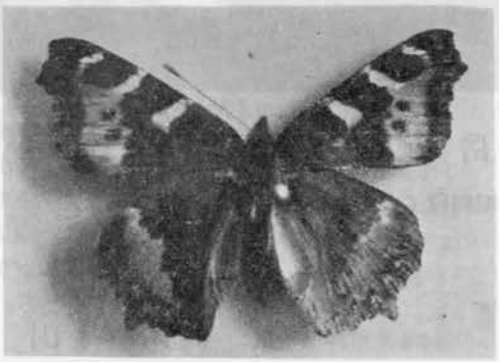
普通のモンキチョウの近似種だが本邦では中部山岳地帯にのみ産する。日本産高山蝶の代表的なもので2000m以上の高山草原帯に限って棲息し、タカネヒカゲに次いで高山性が強いものである。本種は浅間山に産するミヤマモンキチョウの亜種で分布区域は狭く、北アルプス一帯に限られている。当地域における本種の分布状態は興味深く、一言にしていうならば非常に極限されていて後立山の続きの三ツ岳、野口五郎岳および高瀬渓谷をへだてた餓鬼岳には相当多産するが当地域には散見するのみで連続的にはみられていない。すなわち、鹿島槍岳の冷地から爺ケ岳の種池にわたる一帯には多産するが、五竜岳以北には全く見当らない。白馬岳などは本種の食草であるクロマメノキのりっぱな群落があるにもかゝわらず、いまだにその記録がない事実は近距離の峰続きという環境からみても興味深い。発生期間は短く7月下旬—8月中旬までゞ越冬は幼虫態で行なわれるという。当地以外の産地は立山、弥陀ケ原方面、槍、穂高山塊。



3 コヒオドシ

Aglais Wrticae connexa Butler

本種は6、7月頃好んで山小舎の塵捨場や石の上、花上などに多数集まるのを見るが当地に於ける記録は唯一回（1949年7月8日）針ノ木峠で大破したオス1頭を得ているのみで、はなはだ稀な種であるが、槍ケ岳、上高



地近傍は多産するので有名であり、同地を中心として同心円的に遠ざかるにしたがって漸次減少し現在のところ前述の針ノ木の記録が北アルプスでの北限であるが今後の調査によってはもっと北へ伸びる可能性もあるだろう

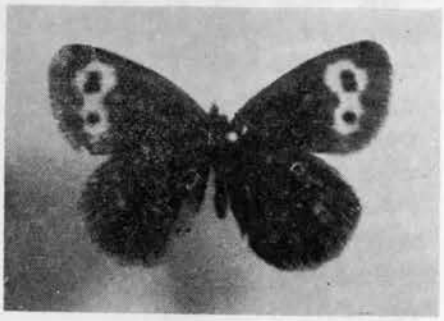
以上のように本種の鹿島連峰における分布は極めて局部的に限られており、個体数も、また、はなはだ少ない

幼虫はイラクサ科のムカゴイラクサ、ホソバイラクサなどを食する。なお、当地以外では上高地、槍、穂高方面、八ケ岳に多産する。

4　ベニヒカゲ

Eredia nephoniea jangon

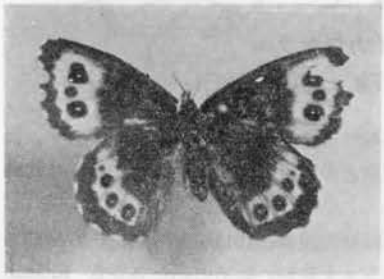
本種はヒカゲチョウ科、ベニヒカゲチョウ属に属し次種のクモマベニヒカゲと同属である。飛翔は緩く、草本帯以上に分布し高山植物の群落に多く見られ最盛期は8月初旬から中旬である。当地域における分布は極めて広範囲で全山にわたり中でも大規模なお花畠をもつ白馬岳は多産する。幼虫はカヤツリグサ科のタニスゲ、ヒメカンスゲ、などを食し、越冬は三令幼虫で行うという。



5　クモマベニヒカゲ

Eredia eigea takanonis Matsumura

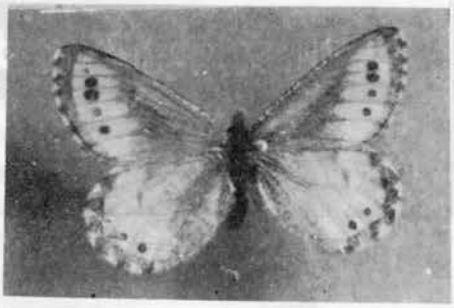
本種は前種の近似種で極めて酷似するが橙色斑紋が後翅まで発達しているし、またその裏面に鮮明な白帯を認められる点が判別点といえる。生態も大体同一であるが前種に比して幾分高山性が強いようであり、その故か北アでは前種と混飛しているが本種の方がむしろ多い。食草は同じくタニスゲ、カンスゲ等のカヤツリグサ科植物で越冬も幼虫態で行なう。同属の当地以外の産地は北ア一帯、戸隠、浅間山麓、八ケ岳など。



6　タカネヒカゲ

Oeneis asamana Matsumura

同属は全て寒地性の種で北極周辺の高緯度地域に多く低緯度地域では高山蝶となる。本種こそ純粋な高山蝶ともいうべきで常に頂上附近の礫地帯に棲み、ほとんど草木帯に下らない。7月一ぱいから8月上旬にみられる極地味な色彩のヒカゲチョウである。日光を好んで現われ、礫土に横倒して休止する奇習をもつ。すなわち地上に静止する時は体を風の方向と反対に横倒するのであって翅の裏面は淡黄褐色の保護色であるため、発見は困難な場合が多い。

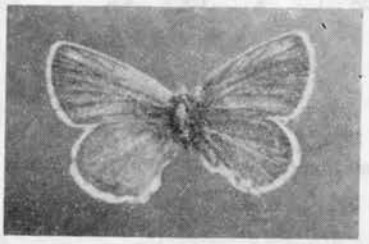


しかし、飛翔は緩慢できわめて容易に採集できる。本種の当地域における分布状態は前記のベニヒカゲ属と同じく鹿島連峰諸山の尾根筋に7月一ぱい見出されるが最盛期は中旬から下旬にかけてである。本種は個体変異がはなはだしく、今試みに白馬岳の個体と烏帽子岳のものとを比較した場合斑紋にしても大きさにしても極度の変異が認められる。なお北海道大雪山には本種に近いダイセツタカネヒカゲがいることは有名である。食草はカヤツリグサ科のヒメスゲ、イワスゲで、越冬は幼虫態で雪の下に2冬過し、3年目に羽化するということが近年明らかにされた。当地以外の産地としては北アの尾根筋一帯及び八ケ岳には少数産する。

7　ヤリガタケシジミ

Lycaeides yarigatakeana Matsumura

本種を高山蝶に入れるのはどうかと思うがこゝではあえて取りあつかってみた。シジミチョウ科のLycaecdes属にあり同属のアサマシジミ Lycaecdes Eulsolana yagina Strand に酷似するがはるかに小型で、その色調もまた明るいのを常とする。その発生地は局部的であって上高地の徳沢から槍沢附近に限られ、その名の由縁をなしている。本種の当地域における記録は故細野淳氏によりやり温泉附近で1950年8月12日オス1頭および南高校生によって鹿島部落でオス1頭を採集している。他は県外の人により2、3白馬岳山麓で記録されているだけである。食草はタイツリオヽギとされ、越冬状態はいまだ不明である。



信州文学碑散歩

（8）

屋代東高等学校教諭 福沢武一

竹本雛勝碑 ＝諏訪市

諏訪市正願寺北の坂道をのぼる。家立がまばらになる階段状の耕地を縫っていく。春の陽射が背中に小暑い程にさしている。

丘の小高い中腹に地蔵寺は位置する。丘つづきの墓地が背後に見通される。ここ門前からは諏訪市の半ばが見渡される。その斜前方に湖水が静かにひろがっている。

本堂の向って左、境内を縁どって石碑が並んでいる。曽良の背像の刻まれた碑もある。余り感心しない。種々あわせて9基。内、句碑は5。一番心をひかれるのは東端の筆塚。高さ125センチ。幅37センチの自然石。簡潔に刻字する。――**竹本雛勝碑**。

その楷書は敬虔な心懐をたたえている。肩あがりなところ、――鋭利な知性がきき、しかも、それを抑えるものがある。各字の最も太い一画がそれ。がっちりと地をふみしめている意志。一画々々にこもる節目――これも意志の所在を明かにする。しかも、空虚な力瘤に終らない。美しい意志といおうか……。碑の左側に、**大正6年4月建之　門弟一同**とある。ああ、これは筆塚なんだなと、納得する。その点、左隣の碑ははっきりと歌っている。すなわち、――**竹本雛久報恩碑**。……この方は明治44年の建立。碑の二人はおそらく兄弟だ。

さて、雛勝碑の右側面を見ると、次の句が刻まれる。字の大きさからしても、花を添えるためのものであることが察せられる。もっとも、ゆかしい限りの花。心温るものに満ちる。

座をここに友を待ちけり花の影　京花女

きよう突然余所の土地から来訪した僕。竹本兄弟にしても、京花女にしても、全然知るところがない。庫裡（くり）についてたずねる。相憎住職が不在。なに一つ明かにすることができない。やむなく、またの機会にまつことにする。

方向を定めない小風が吹く。水をたんまり使って拓本をとる。物さびた石肌が紙の上に浮いてくる。とっても大正中期の碑とは思えない。本堂の屋根越しに陽足は豊かにこぼれてくる。

地続きにあるのは幼稚園。ここからも卒業式の唱歌を練習する声が流れている。

後記　竹本雛勝碑に限ってここには筆をとった。並びいる他の句碑を無視しているのではない。本堂南の庭園を認めない訳でもない。いずれ他日紹介したい。いまそれを敢てしない。この土地の人物伝に僕が余りにもくらいためばっかりに。

珍しい昆虫三種について

＝ガロアムシ、トワダカワゲラ、セツケイカワゲラ＝

八坂中学校教諭　倉田　稔

ガロアムシ

Galloisiana nipponensis Caudell et kiing

今のところ世界でも日本と北米だけに棲息していると言われている興味ある昆虫で、氷河時代にアジアとアメリカ間の陸橋を渡って南方へ追い出されたものであろうと考えられているが、はっきりしたことは不明である。

しかしながらその口器や肢の形態、交尾器の形態、成虫になっても翅を欠くことなどよりみて、形態学的に極めて原始的な昆虫であると考えられる。また生態的もに特異で、日本における棲息場所は、山の斜面の土中、石の下、朽木の下などの湿度の相当高い陰地に限られている。

日本における最初の記録は1915年8月26日、27日に当時、東京のフランス大使館に勤めていた外交官 E.Gallois 氏により日光の中禅寺で採集されたものによって行なわれた。

その後各地より採集報告がなされ、現在では北は新潟県や北アルプス山中より、南は長崎県にわたり、採集高

度も2800m（乗鞍岳）より東京都下の高尾山まで分布していることが知られているが、将来は更に東北地方や北海道からも採集されることが予想される。

大町周辺では鹿島連峰（後立山連峰）にも相当広範囲に分布し、本年7－8月の調査では針ノ木岳中腹（1600m）や籠川の渓谷には極めて普通に分布している事がわわった。

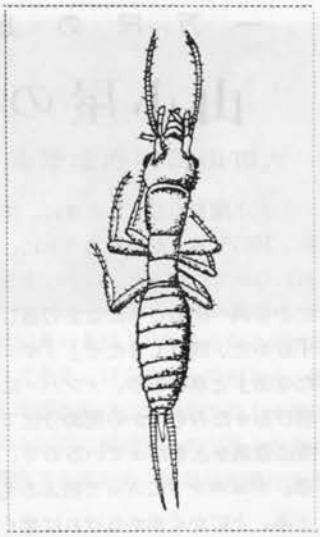
分類学的には直翅目コオロギモドキ科に属しゴキブリに似ており、現在この仲間は世界からはっきりしたものだけで5種類知られている。そして日本にはこのうち2種類が知られている。一生無翅ですごし、成虫になるまでには7－8年を要すると言われている。成虫は茶褐色であるが、幼虫は頭部が茶褐色である以外は純白色で、幼虫や成虫は山中の石の下、腐植質の中などで生活しており、弱い昆虫類を採って食べている。白蟻で飼育したという報告もあるが、ともかく相当貧食でなかなか大食するという。まだガロアムシの生活史は明らかになっていない。

トワダカワゲラ

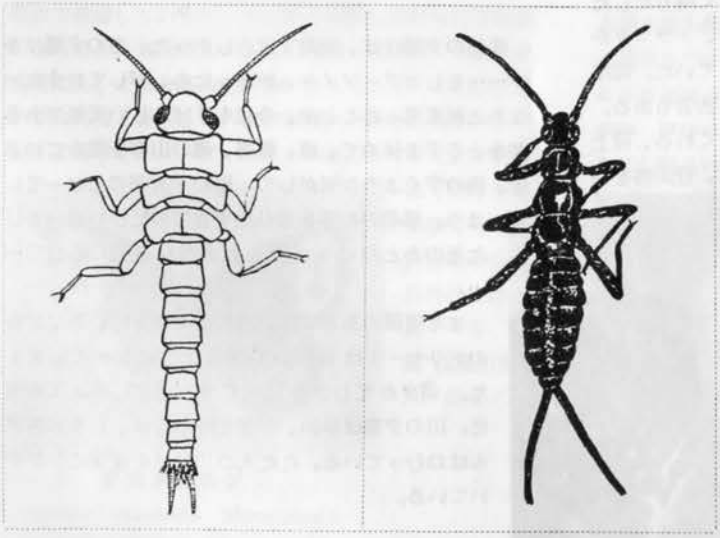
Scopura Ionga Ueno

本種は1952年十和田湖畔の小川ではじめて採集されたのでこの名前がついた。その後本州と北海道の各地より採集されているが、いずれも高山及び山間部の水温が極めて低く、しかも水温の年変化の少ないところより採れていたので氷河期の遺存種ではないかなどと言われていたが、どうもあやふやである。がしかしその形態や生態には特異なものがある。

例えば成虫になっても翅がなく（原始的とみてよい理由）体の色や形態も幼虫とほとんど変りないこと。仲間がなく一科一属一種という特別な存在であること、幼虫及成虫の分布が水温によって極度に限られているなどあげる事ができる。水温が10°C前後で年変化の少ない山間渓流で、源流のように川巾がせまく堆石の間をちよろちよろ水が流れるところ、雪渓から流れ出る小川の中やふちのこけ類の中、などにいる。川底をさらったり、水中の石をうら返したり、川底にある落葉などすくい上げると、体全体が茶褐色をした幼虫や成虫がもぞもぞしている。これがトワダカワゲラである。成虫は年一回現われるが、成虫の現われる時期は棲息場所によって異り北アルプス地方では大体10月から11月頃である。羽化するようになると幼虫は水中よりはい出て、まわりにある小石の上などで、幼虫時代の皮をぬぎ捨てる。羽化したばかりの成虫は体全体が淡黄色をしているが、しばらくすると、幼虫と区別出来ない色になる。成虫は20日前後で死ぬ。雌は産卵すると10日位生きているという。トワダカワゲラの幼虫、成虫の食物は硅藻や昆虫幼虫類、成虫類などある。



ガロアムシ（メス）大沢小屋産



左はトワダカワゲラ（メス）　右はセッケイカワゲラ（メス）
いづれも針ノ木雪渓産

セッケイカワラゲ（セッケイムシ）

Allocapnia nivalis Ueno

2月下旬から3月の厳冬の早朝に積雪上のこおりついた面の上や、春から夏季にかけての登山の時など雪渓にゴマをまきちらしたように黒い虫が活動しているのを見かけておどろく事がよくある。一般に「雪虫」と呼ばれているこの虫がセツケイカワゲラとその仲間の虫たちである。セツケイカワゲラは一般に成虫になっても翅がなく体は黒く細長い、約10mm程の大きさの虫である。アルプス山中では5、6月の雪どけ期の雪上で採られるが本格的な登山期になるとごく稀になってしまう。雪渓上の本種は相当に速く這っている。

（大町山岳博物館学芸委員）

一万尺の上で

山小屋の生活

大町山岳博物館学芸委員 武田睦男

大沢小屋を出発したときに、また雨が激しく降りはじめ、10分も歩くか歩かぬうちに、もう体じゅうびしよぬれになってしまった。しかし引き帰すわけにはいかないだが雪渓へ出るころにはあの激しかった雨もやんで来た「しめた、晴れてきたぞ」「やっぱり登ってきてよかったなあ」と喜びあう。メンバーはOB会の6名である。喜びあったのもつかの間30分位で又降り出してきた。今度は強風をともなっているので、泣き面にハチの態である。シュルンドに入って皆ふるえながら早いとこ昼食をとる。とにかく歩かなければ寒くてしかたがない。風は向い風で息がつまり、非常に歩きにくい。チョツト力をぬくと2、3歩も吹きとばされる。

突然、シュル、シュル、シュルと音をたてて我々の横を落石がかすめて行く、一瞬ひやりとしてもう来ないかと見上げる。

峠の真下の急攀を終って針ノ木小屋に着くとほっとした気持になる。少しばかりの薪で暖をとり大沢小屋に下る登りに比して下りは快適だ、3Kほどの雪渓をグリセードですっとばし、鼻歌まじりのヨーデルもとびだすほどの愉快さであった。

毎年のことであるが荷上げの時期が、ちようど梅雨期のときである。高校時代の時の荷上げにも降られたことなど思いだす。今年も例年と変りなく降られた。

トラツクに乗って大町を出発すると間もなく降りだした雨が扇沢を過ぎると、ますますひどくなり、トラツクから荷をおろすときには皆びしよぬれになっていた。毎年はなやかに伝えられる山開きの影にこんな苦労もある。

4、5日は山小屋の修理と荷上げに明けくれる、荷上げも終り、小屋の整備も出来るといよいよ、登山客を待っばかりである。

× ×

シーズンも始めのころ、7月中旬ごろまでは、一般登山客は割合少ない。各大学の山岳部あるいはワンゲル（ワンダーフォーゲル）の部員たちが涸沢や劔の合宿を目指して縦走していくのである。この鹿島連峰の山々には白馬岳方面の華やかさはないが、それだけに静かな山をとねがう人達が多いのではなかろうか。大パーテーは少なく、地元の高校の全校登山の団体位のものである。普通は2～3～10人位のパーテーがほとんどで、時として女性の単独行の方もみかけることがある。鹿島連峰縦走をする人も最近ずいぶん多くなったようだ。登山者のうちで半数以上はカタ雪をこわがっている人を見かける。シーズン始めにも、雪がこわいために道を間違えて登った人もあった。又途中で遊びすぎて、夜遅く小屋にかけ込むような人も時たまある。これ等は特に人に迷惑かけるばかりでなく、遭難のおそれもあるので充分注意を与えている。

針ノ木峠より鹿島を望む

× ×

昨日の夕焼けは、実際すばらしかった。あの夕焼けを……もしカラーフイルムがあったら、写しておきたいなあと何度思ったことか、今日もすばらしい天気である薪をとる手を休めて、槍、穂高、劔の山容を眺めていると、胸のすくような気がして、思わず大声でどなってしまう。早朝のお客を送り出すまでの忙しい思いをしたそのあとのゆっくりしたような気分にも似て……。

まだ雪渓のある頃は、消えゆく雪を惜しみながらのグリセードは毎日の日課のようになってしまった。朝夕の忙しさを忘れてすべる楽しみは又格別だ。山の夕暮は早い、午後七時頃には、もうお客さんはねむっている。ただ天の川だけが夜空にかがやいている。

針ノ木峠より槍ケ岳方面を望む

（自）（然）（に）（親）（し）（む）（活）（動）

海と山を結ぶ会

本会と合わせて行われた信濃生物会総会は7月9日午後の都立大学教授団勝磨先生の〝動物発生について〟の講演から始まった。続いて昭和33年総会が開催され、翌10日午前も同様に講演、午後は会員の研究発表と討議があった。

終了後、長途の旅から解放された千葉県生物学会と合流し、初顔合せがあって、〝海と山を結ぶ会〟の幕は開かれた。千葉県は千葉大の沼田真先生外36名である。この日は映画会、山岳博物館見学、登山の準備などにあわたゞしい時間を過された。明くれば11日、いよいよ待望の白馬岳登山。海辺では山といえば海抜40m位の山しか知らぬ人も混えて50名のパーティーである。山岳博物館学芸員や地元のガイドで、白馬尻まではゆっくりの行程で、変って行く山の植物を観察、大雪渓にいたる。雪渓の登りは快適、しかし登りきる頃から降り出した雷雨は物すごく、一同閉口したが、葱平にさしかゝると雨も降ったり、止んだりの天候。さすが本邦唯一の高山植物の宝庫だ。一面に咲き競うお花畑の高山植物の名を覚えるも容易ではない。バテ気味になる頃、頂上ホテルに到着、ガスに包まれた中を高山植物の観察をする者、頂上へ行く者などでその日は暮れた。12日は杓子岳、やりが岳と縦走である。シロウマリンドウ、コマクサ、ウルップソウなど珍らしい美麗なお花が顔を見せたり、ライチョウのヒナが歓迎してくれたり、また槍ケ岳、立山連山の展望もよろしく、全くの好条件。メモを取ったり、カメラスケッチをしたり全く忙しい。やり温泉から猿倉へ下る途中、あやぶまれた天候がくずれ出し、滑り転び、ひどい泥地の中を下山の途についた。信濃の先生は来年ぜひ海へということで、短い日程ではあったが有意義な海と山を結ぶ交歓会は終了したのである。

写真は頂上ホテルにての会員

山の自然科学教室

今年は都内鈴ケ森、代々木、御園、井萩、阿佐ケ谷、泉南の各中学校から120名の参加者を得、それに合わせて顧問に印東弘玄先生付添教師、教育大学野外研究同好会大町山岳博物館学芸員ら50名が引率、指導にあたった。

7月27日より第1日　居谷里―山岳博物館見学、第2日　夏季大学―細野―黒菱小屋、第3日　黒菱小屋―八方山―八方池―黒菱小屋、第4日下山といった日程で30日全員無事帰京した。居谷里附近ではムラサキミミカキグサ、ミミカキグサ、コタヌキモなど食虫植物やハツチョウトンボの採集、八方尾根の咲き乱れるお花畑ではチングルマ、ミヤマムラサキ、ユキワリソウ、ムシトリスミレなど20種余に及ぶ高山植物を観察、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲなどの高山蝶、八方尾根の蛇紋岩などいたるところ自然の教室を与えてくれた。八方尾根からの展望もまたよろしく、白馬三山、鹿島連峰は手にとるようにパックにこれら連山をいただき尾根一面に展開されるお花畑に腰を下ろして休息のひと時は、顧問の印東先生の話を始め、山岳、気象、昆虫、両棲類、鳥類、植物の各先生方の説明があった。大自然の造形の美がわれわれ大部隊を心ゆくまで満喫させ、自然に親しむ若人たちが印象的であった。当初台風が頭痛の種であったが、登山の際は台風もどこえやら、全くの快晴で、下山時の日焼した顔には、白い歯が健康そのもののようにまばゆく、笑いは絶えなかった。そして歌が〝山よさよなら　ご気嫌よろしう　また来る時にも笑っておくれ〟といつまでもこだましていた。

写真は八方池の近くで話を聞く生徒たち

クマ（ツキノワグマ）幼体

資料室

1950年3月20日　大町市平区鹿島槍ケ岳7合目附近、胸高直径90cmのダケカバの根上りになった穴（方言ではこのような部分をザルと呼んでいる）の中で捕えられた幼獣である。元来、ツキノワグマは秋の彼岸頃交尾をし翌年の3－4月頃穴の中で2子を分娩するといわれている。この幼獣は雌雄で生後2－3日位と思われる。体重は200匁程あり、雄のほうが幾分大きい。幼獣を捕えた時の模様を猟師は次のように語ってくれた。

巣穴は急しゅんな崖の上にあり、近よるのに相当苦労したようである。最初2匹の猟犬が発見し、良く訓練された2匹は勇敢に穴の中に飛び込んで、冬眠中の親熊雌雄と格闘したようである。猟師がようやく這い上った時親熊が400m程あった雪の谷間を尻橇のような恰好で滑り降り一目散に逃げてゆく姿を認めたという。なお、猟犬は穴の入口で止って中をのぞきながらうなっているので、穴の中に棒を突込んでかきまわしてみたという。ククク…、と幼獣の啼く音がしたので、腹ばいになって穴にもぐり込み、2匹の熊の幼獣を発見した。穴の中は150cm四方あって中で立っていることができたそうである

幼獣のいた部分には細い木の枝と枯葉がほんの少し敷かれ、幼獣はまだ目が開かず、頭を持ち上げるのがやっとの弱々しい姿でごろごろしていた。早速小屋に持ち帰り、丁度ミルクを持っていたので水で薄めて飲ませたところ、どうやら幾分飲んだようである。しかし、その夜雄が落命した。翌日親熊をとるべく捜査したが遂に発見できなかった。幼獣の雌はこの日目が開いて元気にミルクを飲んだようであるが、惜しいことに5日目に落命した。

こうして、ツキノワグマの赤ちゃんは一組の標本となって博物館の陳列ケースに収められている。

今年の夏山

【上】

6月は全くのカラつゆ、農家の雨乞いが盛んに行われる頃、大学山岳部の合宿訓練から小屋開前の北アルプスははや賑わい始めた。

7月1日－8月31日夏山といった概念はもはや古い感、5月のゴールデン、ウイークから、もう夏山が始ったように、白馬岳、上高地方面は女性を含めた相当数のパーテーが入山している。ウエストン祭は6月12日、白馬、鹿島連峰は6月25日開山祭を行っている。7月小屋開き、上旬北アは雨天模様であったが、まもなく回復して連日の好天、本格的な登山シーズンを思わせた。がしかし7月20—25日11号台風下、風雨に夏山は全く閉ざされた。特に上高地では24日夜からの豪雨続きで、バス道路、登山道の決壊、梓川の増水、山崩などにより、登山者3000人カン詰騒ぎ、全国で始めてという登山者に対する災害救助法が発令され、一時は混乱状態を招いた。

29日久しぶりに晴れた北アルプスは再び活況を呈し、8月1、2日頃は今夏のヤマともいうべき最高の登山者を記録、白馬岳、上高地で一日2000人を数えた。中旬たびたびの雷雨や雨天の日が多かったが、それでもなを登山ブームは持続され、8月19日涼風そよぐ白馬岳で1000人の入山者を数えたという。

今夏入山者を信濃駅より見ると信濃四ツ谷、森上駅降車25,133名、大町駅降車19,518名、計44,651名、昨年より3割増という結果がでている。　（高橋）

編集後記　編集子怠慢で発行日が遅れましたことをお詫び申上げます。次号より発行日をまもります。いつものことながら、編集もマンネリズムに陥りがち、内容や編集やらもっともっと刷新の余地あることを認めます読者諸氏の投稿に期待するとともに「山と博物館」に対するご希望、ご意見をおきかせ下さい。なお、次号より地元写真愛好家の山岳写真を掲載して行く予定ですのでご期待下さい。

山と博物館　第3巻第8号　1958年8月20日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　松本市巾上町 353
信州印刷株式会社